

各関係機関長 殿

岡山県病害虫防除所長
(公印省略)

病害虫発生予察情報について

病害虫発生予報第4号を下記のとおり発表したので送付します。

令和3年度病害虫発生予報第4号

令和3年6月30日
岡山県

予報概評

作物名	病害虫名	発生時期	発生量
水 稲	葉いもち	—	並
	穂いもち	並	並
	紋枯病	並	並
	ヒメトビウンカ	—	少
	縞葉枯病	—	並
	ツマグロヨコバイ	—	少
	ニカメイガ	—	並
	セジロウンカ	—	少
	トビイロウンカ	並	並
斑点米カメムシ類	—	少	
モ モ	せん孔細菌病	—	並
	灰星病	—	やや少
	モモハモグリガ	—	少
	ナシヒメシンクイ	—	やや少
	ハダニ類	—	やや多
ブドウ	晩腐病	—	並
	べと病	—	やや多
	うどんこ病	—	やや多
	フタテンヒメヨコバイ	—	並
	チャノコカクモンハマキ	—	並
果樹共通	カメムシ類	—	並
キュウリ	べと病	—	やや多
	うどんこ病	—	やや多
	褐斑病	—	やや少
	炭疽病	並	並
キュウリ・ナス	ミナミキイロアザミウマ	—	並
トマト	疫病	並	並
	葉かび病	—	やや多
(アブラナ科野菜) ダイコン	軟腐病	並	並
	キスジノミハムシ	—	並
	コナガ	—	並
野菜共通	ハスモンヨトウ	並	やや多
	アブラムシ類	—	やや少
	モザイク病	—	並
キ ク	白さび病	—	並
	ハダニ類	—	やや多
	アブラムシ類	—	やや少

1. 普通作物

(水 稲)

(1) 葉いもち

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月 21、22 日の巡回調査によると、葉いもちの発生圃場率は 0 % で平年 (1.7%) よりやや低かった。

イ. BLASTAM-メッシュ岡山版 (以下、ブラスタム) による葉いもちの感染好適条件は、6月 16、18 日及び 19 日に県内で比較的広域に出現した。6月 28 日までのブラスタムの結果は下表のとおりである。感染好適条件が出現後、約 1 週間頃に初発あるいは病斑数の急激な増加が予想される。

ウ. 6月 24 日発表の季節予報 (1 か月予報) によると、7 月の気温及び降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. 補植用の苗は、伝染源となるので処分する。

イ. 箱処理剤を使用していない圃場では、発生を確認後は速やかに防除を行う。

箱処理剤を使用している圃場で発生を確認した場合は、箱処理剤と同系統の薬剤の使用を避ける。

ウ. 現時点で未発生圃場でも耐病性の弱い品種 (コシヒカリ、あきたこまち、ヒノヒカリ、朝日) は初発後の病勢の進展が速いので、早期発見、早期防除に努める。

エ. 本病は、曇雨天日が多い場合に発病が助長されるので今後の気象に注意する。

表 アメダスデータから推測される葉いもちの感染好適条件の出現状況

(BLASTAMメッシュ岡山版)

地帯区分	北部地帯					中部地帯					南部地帯				
	上長田	千屋	奈義	古町	新見	久世	津山	福渡	和気	高梁	岡山	虫明	倉敷	笠岡	玉野
6. 15	○	-	-	-	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-
16	○	○	●	-	●	-	●	●	●	●	-	-	-	-	-
17	-	-	-	-	-	-	-	●	●	-	-	-	-	-	-
18	-	○	-	-	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	-
19	○	○	●	●	-	-	●	●	●	●	●	●	●	●	-
20	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
21	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
22	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
23	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-
24	-	-	-	-	-	-	-	●	-	●	●	-	-	-	-
25	-	-	-	●	○	●	●	-	-	-	-	-	-	-	-
26	○	○	●	●	-	-	●	-	-	●	-	-	-	-	-
27	○	○	-	-	○	●	-	-	-	-	-	-	-	-	-
28	-	-	-	-	-	-	-	●	-	●	●	-	-	-	-

● : 感染好適条件 ○ : 準感染好適条件 - : 感染好適条件は現れなかった

(2) 穂いもち (極早生種対象)

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

ア. 極早生種の生育は概ね平年並である。

イ. 6月21、22日の巡回調査では、葉いもちの発生圃場率は0%で平年(1.7%)よりやや低かった。

ウ. ブラストムによる県中北部における葉いもちの感染好適条件は、6月16、18日及び19日に県内で比較的広域に出現した。6月28日までのブラスタムの結果は前表のとおりである。

エ. 6月24日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温及び降水量はほぼ平年並で、発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. 本病は、曇雨天日が多い場合に発病が助長される。

(3) 紋枯病

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月21、22日の巡回調査では、平年同様発生を認めなかった。

イ. イネの茎数は概ね平年並で推移している。

ウ. 6月24日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温及び降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

(4) ヒメトビウンカと縞葉枯病

予報内容

ヒメトビウンカ(第2世代幼虫)

発生量 少

縞葉枯病

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における6月5半旬までの飛来は認めておらず、6月1～5半旬の平年(6.9頭)より少なかった。

イ. 6月21、22日の巡回調査におけるすくい取り調査(20回振り)による発生圃場率は34.5%で平年(49.9%)より少なく、1地点あたりの成幼虫発生量は2.0頭で平年(2.4頭)よりやや少なかった。

ウ. 近年の県南部における縞葉枯病の発生は、概ね平年並で推移している。

(5) ツマグロヨコバイ(第2世代幼虫)

予報内容

発生量 少

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における第1世代の初誘殺は6月3半旬で平年(6月2半旬)並、6月1～5半旬の飛来数は3頭で、平年(53.7頭)より少なかった。

イ. 6月21、22日の巡回調査における見取り・払い落とし調査による発生圃場率は2.4%で平年(9.2%)より低かった。

ウ. 6月21、22日の巡回調査におけるすくい取り調査(20回振り)では、成幼虫の発生量は0.7頭で平年(1.2頭)より少なかった。

エ. 6月24日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温及び降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. ツマグロヨコバイが媒介する萎縮病は、近年巡回調査において発生を認めていない。

(6) ニカメイガ (第1世代幼虫)

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおいて6月5半旬までに平年同様誘殺を認めていない。

(7) セジロウンカ

予報内容

発生量 少

予報の根拠

ア. 6月21、22日の巡回調査における見取り・払い落とし調査では発生が認められず、発生圃場率では平年(20.5%)より低かった。

イ. 6月21、22日の巡回調査におけるすくい取り調査(20回振り)では、1地点あたり成虫発生量は0.1頭で平年(0.9頭)より少なかった。

ウ. 赤磐市の予察灯における6月1～5半旬の調査では飛来を認めず、平年(9.0頭)より少なかった。

エ. 6月24日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温及び降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖を助長する条件ではない。

(8) トビイロウンカ

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市及び真庭市の予察灯において平年同様6月5半旬までに飛来を認めていない。

イ. 6月21、22日の巡回調査において発生を認めなかった。

(9) 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ)

予報内容

発生量 少

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における6月1～5半旬の誘殺数は23頭で平年(52.6頭)より少なかった。

イ. 6月21、22日の県北部イネ科牧草地のすくい取り調査(20回振り)では、アカスジカスミカメの発生量は1地点当たり14.9頭で平年(23.1頭)より少なかった。

ウ. 6月24日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温及び降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. イネ科植物の穂は餌であり、産卵場所でもあるため、水田周辺のイネ科植物は除去する。ただし、穂の付いたイネ科植物をイネの出穂2週間前から出穂後3週間の間に除去すると、カメムシを水田に追いやることになるので避ける。

2 果 樹

(モ モ)

(1) せん孔細菌病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月24日の巡回調査によると、発生圃場率は17.9%で平年(31.4%)よりやや低かった。

イ. 6月24日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. 次作における伝染源量を減少させるために収穫後の防除を徹底する。

(2) 灰星病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 県予察圃場における6月23日の幼果の発病果率は3.5%で、平年(11.9%)より低かった。

イ. 4月下旬の巡回調査では花腐れの発生圃場率は平年よりやや低く、6月24日の巡回調査の幼果での発生圃場率は3.6%と低かった。

ウ. 6月24日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

(3) モモハモグリガ(第3世代幼虫)

予報内容

発生量 少

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～5半旬の誘殺数は0頭で、平年(12.0頭)より少なかった。

イ. 6月24日の県南部巡回調査では発生を認めず、発生圃場率は平年(4.6%)より低かった。

ウ. 6月24日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温及び降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖を助長する条件ではない。

(4) ナシヒメシンクイ(第3世代幼虫)

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～5半旬の誘殺数は2頭で、平年(16.6頭)より少なかった。

イ. 6月24日の県南部巡回調査における新梢被害発生圃場率は35.7%で、平年(18.9%)よりやや高かったが、発生程度は軽微であった。

ウ. 6月24日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温及び降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖を助長する条件ではない。

(5) ハダニ類

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

ア. 6月24日の県南部巡回調査における発生圃場率は46.4%で、平年(24.9%)より高く、一部に被害程度がやや高い圃場が見られた。

イ. 6月24日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温及び降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖を助長する条件ではない。

(ブドウ)

(1) 晩腐病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月の降水量は平年よりやや少なかったことから、幼果の感染は平年よりやや少ないと考えられる。

イ. 6月24日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

ア. ベノミル剤（ベンレート水和剤）及びアゾキシストロビン剤（アミスター20フロアブル、ストロビードライフフロアブル）に対して感受性が低下した耐性菌が本県各地で確認されている。

(2) ベと病

予報内容

発生量 **やや多**

予報の根拠

ア. 県予察圃場では、平年（6月25日）より早い6月14日に初発生が認められた。

イ. 6月23日の巡回調査によると、発生圃場率は100%で平年（22.7%）より高かった。

ウ. 6月24日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温及び降水量はほぼ平年並とされている。降雨が続いた場合、発病をやや助長する条件となる。

防除上の参考事項

ア. 梅雨時期の連続降雨により急に病勢が進展する可能性がある。

イ. ブドウベと病に登録のあるストロビルリン系殺菌剤（アゾキシストロビン剤（アミスター20フロアブル）、クレソキシムメチル剤（ストロビードライフフロアブル）、ファモキサドン剤（ホライズンの一成分））に対する耐性菌が本県の一部で確認されている。本系統の殺菌剤の使用は1作期1回とし、他系統の殺菌剤と組み合わせて使用する。

ウ. 令和3年度植物防疫情報第3号（6月30日発表）参照。

(3) うどんこ病

予報内容

発生量 **やや多**

予報の根拠

ア. 6月24日の巡回調査によると、発生圃場率は18.2%で平年（9.1%）よりやや高かった。

イ. 6月24日発表の季節予報（1か月予報）によると、降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

(4) フタテンヒメヨコバイ（第2世代幼虫）

予報内容

発生量 **並**

予報の根拠

ア. 6月24日の県南部巡回調査において発生を認めず、平年（1.4%）並であった。

イ. 6月24日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温及び降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖を助長する条件ではない。

(5) チャノコカクモンハマキ（第2世代幼虫）

予報内容

発生量 **並**

予報の根拠

ア. 赤磐市のフェロモントラップにおける6月1～5半旬の誘殺数は9頭で、平年（8.8頭）並であった。

イ. 6月24日の県南部巡回調査では平年同様発生を認めなかった。

ウ. 6月24日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温及び降水量はほぼ平年並とされており、本虫の増殖を助長する条件ではない。

(果樹共通)

(1) カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ)

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 赤磐市の予察灯における4月～6月5半旬のチャバネアオカメムシの誘殺数は90頭で平成(93.7頭)並、ツヤアオカメムシの誘殺数は44頭で平成(62.2頭)並であった。

イ. 赤磐市のフェロモントラップにおける4月～6月5半旬のチャバネアオカメムシの誘殺数は、251頭で平成(686.0頭)より少なかった。

防除上の参考事項

ア. 夜温が高く降雨がない場合には本虫の飛来に好適な気象条件となる。

3. 野菜

(キュウリ)

(1) ベと病

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

ア. 県予察圃場(4月27日定植)の発病葉率は50.5%で平成(18.5%)より高かった。

イ. 6月23、25日の巡回調査によると、発生圃場率は62.5%で平成(42.0%)よりやや高かった。

ウ. 6月24日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温及び降水量はほぼ平成並とされており、発病を助長する条件ではない。

(2) うどんこ病

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

ア. 県予察圃場(4月27日定植)において、発病葉率は18.0%で平成(7.6%)より高かった。

イ. 6月23、25日の巡回調査によると、発生圃場率は62.5%で平成(59.5%)並であった。

ウ. 6月24日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温及び降水量はほぼ平成並とされており、発病を助長する条件ではない。

(3) 褐斑病

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 県予察圃場(4月27日定植)において、発病は認められず平成(1.1%)並であった。

イ. 6月23、25日の巡回調査によると、発生圃場率は12.5%で平成(21.4%)よりやや低かった。

ウ. 6月24日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温及び降水量はほぼ平成並とされており、発病を助長する条件ではない。

(4) 炭疽病

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

- ア. 県予察圃場（4月27日定植）において、平年同様発生を認めなかった。
- イ. 6月23、25日の巡回調査では発生を認めず、発生圃場率は平年（4.4%）並であった。
- ウ. 6月24日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温及び降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

（キュウリ、ナス）

（1）ミナミキイロアザミウマ

予報内容

発生量 並

予報の根拠

- ア. 6月23、25日の巡回調査によると、露地、施設栽培のナス及びキュウリでの発生量は平年並であった。
- イ. 6月24日発表の季節予報（1か月予報）によると、降水量はほぼ平年並とされており、発生を助長する条件ではない。

（トマト）

（1）疫病

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

- ア. 6月23、25日の巡回調査によると、県南部の露地栽培及び県北部の雨除け栽培では発生を認めず、発生圃場率は平年（7.6%）並であった。
- イ. 6月24日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温及び降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

（2）葉かび病

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

- ア. 6月23、25日の巡回調査によると、県南部の露地栽培及び県北部の雨除け栽培での発生圃場率は30.0%で平年（20.3%）よりやや高かった。
- イ. 6月24日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温及び降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

- ア. 本病の初発生時期（雨除け栽培トマトでは6月下旬～7月上旬）と病勢進展時期（7月下旬～8月上旬）に効果の高い殺菌剤を予防散布する防除体系は、葉かび病の防除に有効である。
- イ. 一部地域で Cf-9 を持つ抵抗性品種を侵すレースが確認されているので、発生を認めた場合には速やかに防除対策をとる（平成22年度植物防疫情報第4号参照）。
- ウ. 本県では、トマト葉かび病に類似した病徴を示すトマトすすかび病の発生が認められている。肉眼での判別は困難であるが、顕微鏡下で観察すれば、トマトすすかび病菌の分生子が細長い形状であることから葉かび病とは容易に区別できる（平成18年度病害虫発生予察特殊報第2号参照）。

（アブラナ科野菜）

（ダイコン）

（1）軟腐病

予報内容

発生時期 並

発生量 並

予報の根拠

- ア. 6月25日の巡回調査では発生を認めず、発生圃場率は平年（6.0%）並であった。
- イ. 6月24日発表の季節予報（1か月予報）によると、7月の気温及び降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

(2) キスジノミハムシ

予報内容

発生量 並

予報の根拠

- ア. 6月24日発表の季節予報（1か月予報）によると、降水量はほぼ平年並とされており、発生を助長する条件ではない。

(3) コナガ

予報内容

発生量 並

予報の根拠

- ア. 6月1～4半旬の県予察圃場（赤磐市）におけるフェロモントラップへの誘殺数は19頭で、平年（18.9頭）並であった。
- イ. 6月24日発表の季節予報（1か月予報）によると、降水量はほぼ平年並とされており、発生を助長する条件ではない。

(野菜共通)

(1) ハスモンヨトウ

予報内容

発生時期 並
発生量 **やや多**

予報の根拠

- ア. 6月1～4半旬の県予察圃場（赤磐市）のフェロモントラップの誘殺数は147頭で、平年（87.0頭）より多かった。
- イ. 6月23、25日の巡回調査によると、ナス、トマト、キュウリでの発生は認められず、発生圃場率は平年（0%）並であった。
- ウ. 6月24日発表の季節予報（1か月予報）によると、降水量はほぼ平年並とされており、発生を助長する条件ではない。

(2) アブラムシ類とアブラムシ伝搬性のモザイク病

予報内容

発生量 アブラムシ類 やや少
モザイク病 並

予報の根拠

- ア. 6月1～4半旬の県予察圃場（赤磐市）の黄色水盤への飛来数は88頭で、平年（302.4頭）より少なかった。
- イ. 県予察圃場（赤磐市）における6月下旬のキュウリでのアブラムシ類の発生量はやや少なかった。モザイク病は、平年同様発生を認めなかった。
- ウ. 6月23、25日の巡回調査では、アブラムシ類の発生量はキュウリ、トマトで平年並であった。モザイク病の発生圃場率は、キュウリでは25.0%（平年11.6%）、トマトでは0.0%（平年17.2%）で、平年並であった。
- エ. 6月24日発表の季節予報（1か月予報）によると、降水量はほぼ平年並とされており、本虫の発生を助長する条件ではない。

防除上の参考事項

- ア. モザイク病の発病株は伝染源になるので早めに除去し、アブラムシ類の防除を行う。

4. 花 き

(キ ク)

(1) 白さび病

予報内容

発生量 並

予報の根拠

ア. 6月23、25日の巡回調査によると、発生圃場率は9.1%で平年(11.1%)並であった。

イ. 6月24日発表の季節予報(1か月予報)によると、7月の気温及び降水量はほぼ平年並とされており、発病を助長する条件ではない。

(2) ハダニ類

予報内容

発生量 やや多

予報の根拠

ア. 6月23、25日の巡回調査によると発生圃場率は33.3%で平年(0%)よりやや多かった。

イ. 6月24日発表の季節予報(1か月予報)によると、降水量はほぼ平年並とされており、発生を助長する条件ではない。

(3) アブラムシ類

予報内容

発生量 やや少

予報の根拠

ア. 6月1～4半旬の県予察圃場(赤磐市)の黄色水盤への飛来数は88頭で、平年(302.4頭)より少なかった。

イ. 6月23、25日の巡回調査によると、発生を認めず、発生圃場率は平年(13.5%)より低かった。

ウ. 6月24日発表の季節予報(1か月予報)によると、降水量はほぼ平年並とされており、発生を助長する条件ではない。

この情報は、岡山県病害虫防除所ホームページでも公開しています。アドレスは、<http://www.pref.okayama.jp/soshiki/239/> です。

